

息ができないほどの、狂おしい熱量を孕んだ深いキス。

「後悔しても、もう遅いから」

彼は私の両手首を頭の上へと押し上げると、今度は片手ではなく、自らのネクタイを使ってベッドのヘッドボードに容赦なく縛り付けた。

「あ……っ♡ 神原くん……」

「絶対俺から逃がさない。お前が俺をここまで狂わせたんだから、責任とって」

自由を奪われ、完全に無防備になった私を見下ろす神原くんの瞳は、とろけるような熱と、独占欲でギラギラと濡れていた。

強引に私のブラウスを脱がされ、肌が冷たい空気に触れる。同時に神原くんの熱い視線に容赦なく晒されていく。

「神原くん、恥ずかしい……っ、そんなに見ないで……！」

「見るよ。他の男の痕が残っていないか確認しないと」

「そんなことありえないよ……！」

彼は私の下着を引き下げると、ストッキングに包まれた太ももを強引に割り開き、自らの身体を滑り込ませてきた。

衣服の擦れ合う生々しい音。

そして、彼の熱い手のひらが、私の腰の曲線を驚くほどの力で掴み、自分のほうへと強く引き寄せる。

「あ、っ……♡ はぁ♡ ……神原くん……っ♡」

彼の指先が、私の最も敏感な場所へと、焦らすことなくダイレクトに触れてきた。

「……っ、んあ♡ 神原、くん……っ♡」

早く欲しい。だけど、彼は焦らしてきた。

「俺の使って、オナニーしてみて」

突然のことに私は戸惑う。顔が熱くなり、ふるふると首を横に振った。

「え……そんなの、恥ずかしいよ……」

「じゃあ、もうやめておく？」

そんなの耐えられない。

私は恥ずかしさをのみこんで、神原くんのそそり立つモノに手を伸ばす。

熱くて硬いそれに触れた瞬間、神原くんの眉が寄った。

「自分の気持ちいいところに押しつけて」

「んあ♡」

神原くんのモノをクリに押しつける。その熱さと硬さに、ぞくぞくした。

「あ♡ ああ♡」

気持ちいい。だけど、こんなじゃ足りない。

もっと、もっと甘くて激しい刺激が欲しい。

神原くんのモノをクリよりも下の方に持っていく、どろどろの入り口にあてがう。

くちゅ、くちゅ。

たっぷりと濡らしながら、ぐっと中に押し入れようとしたときだった。

「なに勝手に挿れようとしてんの」

「あ♡だって……あ、ん♡ もう我慢できないの」

「ちゃんとと言わないとダメだって、教えたよな？ それとも忘れちゃった？ それならもう一度教え込まないと」

わずかに中に入ったおちんちんを抜くと、神原くんが冷たい眼差しで私を見下ろす。

「脚、開いて」

「は……い♡」

言われるがまま、脚を開いて、秘部を露わにする。

「なんて言うんだっけ？」

「……っ、神原くんの……お、ちん……ちんを……挿れてください♡」

「聞こえない。ちゃんといいなよ。もっと具体的に、ほら」

「……っ、か、神原くんの……っ、おちんちんを私の中に挿れて、ぐちゃぐちゃに犯してください♡」

神原くんが私の腕を掴むと、強引に後ろに向かされる。ベッドにうつ伏せに沈むと、おしりを叩かれた。

ぺちん！

「ああ♡」

「挿れてほしいんだろ？　じゃあ、ちゃんと尻あげて」

「挿れて、ほし……♡　あ♡」

彼に従っておしりを持ち上げると、中に硬いモノが入ってくる。熱くて圧迫感のある彼のおちんちん。

「はあ♡ あああ♡ 気持ち……い……あ♡」

この刺激が欲しくてたまらなかった。

パンパンッ！　ぐちゅぐちゅ。パンパンパンッ！

「ああ♡ 激しッ♡」

嫉妬にのまれた神原くんは、私を押さえつけるように激しく腰を振る。私の中を何度も突き上げて、揺さぶってきた。

「自分で欲しかったんだろ！　この淫乱！」